

# 初心者に学習しやすい中国語e-Learning教材

## An Easy to Learn e-Learning Material for Chinese Beginners' Class

郭 海燕

日本大学理工学部

Abstract: When teaching a foreign language to beginner students, the lack of study hours, classes, materials and individual instruction are all issues. For that reason, the author has developed her e-learning materials for people beginning Chinese language study that have been introduced through face-to-face classes. Through e-learning, improvements in the language study environment, an increased desire by students to study and in particular improved results in listening tests have been noted and the effectiveness of instruction outside the classroom confirmed. The vocabulary in the materials, as well sample sentences containing those words can all be seen and heard online, allowing a full-study cycle, that includes preparation, drills and revision. In addition, as the materials are independently developed, they are responsive to students' desires and changes in Chinese current affairs, providing up to date materials at a reasonable price, that makes them extremely current and easy to relate to. The teaching style introduced as a result of this research, (face-to-face plus own study, own learning), as the new model for language instruction, is expected to set the future standard for language learning.

Keywords: e-Learning material, Chinese beginners, blended learning, self-learning

### 1. はじめに

日本大学理工学部（以下、当学部）における中国語教育は近年、学習者の増加に伴い（中国語の受講者延べ人数は毎年1,400名～1,600名前後に達している）、大学側は需要に応じてクラスの増設や教員の補充、教室の新設など、様々な対応をしてきた。一方、今年4月には北京大学と協定を締結することにより、「夏季中国語語学研修」の実施が開始された。このように中国語学習者数が年々増加している現状と、また大学側として中国語教育の環境作りに力を入れることで、当学部の中国語教育は軌道に乗ったが、教育内容そのものに対しては詳細な議論がなされておらず、いくつかの問題が存在している。本発表ではその問題を明らかにし、解決手段を提示すると同時に、これによる教育効果を示すものである。

### 2. 問題の所在

本学部における中国語教育の問題点として次の5点が挙げられる。

#### (1) 学習時間の不足

初めて学習する言語であるにもかかわらず、十分な学習時間が確保できていない。特に本学部の時間割は理工系科目の実験や実習に時間が多く割かれ、中国語の授業は週1回、多くとも2回しか設置されていないため、学習時間の大半を自習に頼る傾向にある。

#### (2) クラス数の不足

大学側は毎年中国語クラスの増設を行っているものの、履修希望者数があまりに多く人数制限を行わざるを得ない。そのため大学側として学習意志のある学習者に対し中国語学習環境を提供するのが急務である。

#### (3) 授業中での個人指導が不十分

現状では1クラスの学習者が50人～65人程度なため、従来の対面授業での個人指導では教員および学習者共に満足できない。多人数クラスでの全学習者に対する適切な指導を求めると同時に個々の学習者に対応できるという二つの要素を実現する環境の整備が必要である。

Haiyan Guo  
Nihon University  
E-mail: guohaiyan@penta.ge.cst.nihon-u.ac.jp

(受付：2007年7月7日，受理：2007年9月29日)

#### (4) 音声を用いた自習環境の未整備

初めて学習する語学は、授業が進むにつれ個人差が大きくなる。各個人の学習進度に応じて予習・復習する環境、つまり教員がいなくとも、教員がいる環境により近いと思われる、音声や画像を通して学習できる教材が整備されていない。

#### (5) 学習目的に応じた補充教材の不足

対面授業では総合的な内容を説明するにとどまり、限られた時間内では検定試験対策や語学研修に特化した教材の提供や内容まで解説しきれない。一方、市販教材では年度毎の学習者の学習進度に合わせた内容更新の可否が課題である。

### 3. 教育改善の内容と方法

#### (1) 語学学習の環境作り

##### ① e-Learning中国語教材の作成

上述した問題を解決するために、音声や画像により、教員がいなくても生きた言語により近い環境を構想した。具体的には、対面授業を支援するための授業の副教材として、また学習者の予習・復習、中国語検定試験対策に、e-Learning中国語教材を作成することとした。

##### 基本方針

e-Learning中国語教材作成にあたり、当学部で規定された履修要覧を参考にし、将来の実用性と汎用性を考え、中国語検定試験準4級と4級の内容を考慮することとした。なお、ここでは生きた言語を身につけるため、中国人の日常生活において使用される使用頻度の高い語彙を厳選した<sup>[1]</sup>。

##### 構成

内容は教材部と辞書部と中国語検定試験対策部の三つから構成した。教材部は「発音編」,「本文編Ⅰ・入門」,「本文編Ⅱ・初級」(図1),「本文編Ⅲ・中級」,「豆知識集」,辞書部は「基本語彙1000」,中国語検定試験対策部は「検定模擬試験」と「文法事項別問題集」からなる。



図1 本文編Ⅱ・初級 トップページ

#### 特徴

最大の特徴は中国語の語彙、例文に個別に音声をつけ、繰り返し再生できることにある。学生自身が画面(図2)を操作し、音声を聞きながら予習・演習・復習という学習サイクルを通して苦手箇所の反復学習を行うことが可能になる。また、教科書では載せられないほどの大量の練習問題を掲載することで、応用力を身につけることも可能となる。

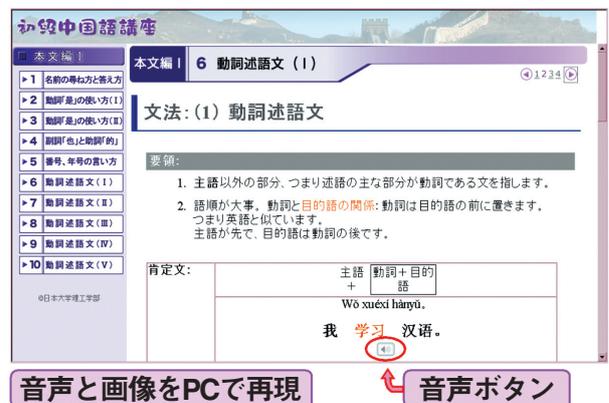


図2 実際の受講者用画面

#### 内容

教材部は学習者に基礎文法を一通り学習させ、辞書部は語彙の説明ごとに、例文・文法説明・関連語彙を説明するもので、これらを踏まえ中国語検定試験対策で実力の向上を図るものである。また、中国文化や日中文化の違いを紹介する豆知識集を設けた(図3)。これらを通して学習者の中国に対する関心を高めることが期待できる。

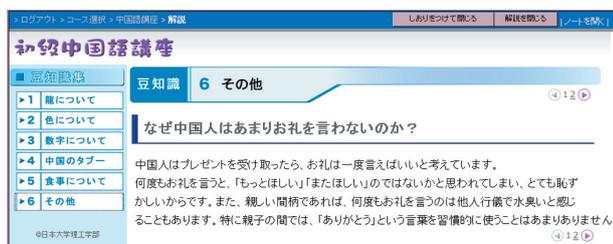
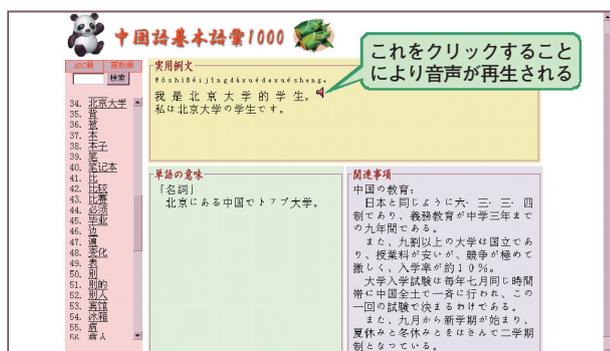


図3 豆知識集の画面

ここで辞書部は教材部と併用可能であり、学習者に対し利便性を提供する。また、辞書部の「関連事項」でも語彙と関連する中国文化、風俗習慣を紹介することで、学習者が中国語を学びながら中国文化にも自然と親しめるよう配慮している(図4)。



中国文化、風俗習慣の掲載で学習意欲の向上へ

図4 辞書部の画面

## ② 夏期講習会の設置

e-Learning中国語教材を用いた夏期講習会を設置し、前期で学習した内容の復習および後期の授業に備える契機を設けることとした。特に対面授業しか学習したことのない履修者や、中国語を履修したくても人数制限で漏れた学生に対してe-Learningの使い方を紹介し、自学自習できる環境を提供した。

## (2) 新しい授業形式

### ① Blended learningへ移行

90分間の授業において、教員による発音の仕組みの説明から文法の解釈、文字を書く練習など通常の対面授業を60分間行ったのち、学習者の学習進度に合わせた内容(発音、文法事項)を確認させるe-Learning教材を用いた自習を30分間行うものとした。



図5 小テスト

### ② 小テストによる学習効果の確認

各課の分量は、学習者の集中力を配慮し20分間程度の学習量を目安とした。自習では、初歩の学習者が陥りやすい文字および発音を各自のパソコンにて繰り返し確認させたのちに、小テストにて学習効果を確認させるものとした。小テスト(図5)は終了すると直ちに採点され、解説が表示され、学習者に対し再試験や不正解箇所の重点的な確認を行わせる形式とした。

### ③ 学習進度の速い学生に対する対応

自習では個人差が大きく課題の終了時間が個人により異なるため、学習進度の速い学生には順次、関心のある課題を自由に選択・自習させた。ここでe-Learning教材はイヤホンを使用しているため、周囲を配慮することなく自習が進められる。

### ④ e-Learning教材による授業外学習の指導

学習者に授業時間外での自習時間を確保させるべく、e-Learning教材は学内外を問わず使用できるものとし、またその学習時間を記録する仕様とした。即ち自習は学生に任せるのではなく、強制力のある自習環境を構築するものである(図6)。学習者に対し学習効果の向上を図るため、一定の学習時間を課することにより、学習者の自習意識を高めさせることができる。

また、自習学習で解決できない場合の対応策として、教材に対する専用の質問窓口



図6 学習履歴管理画面

を設け、学習者からのメールによる質問に当日中に回答できるようにした。

⑤ 中国語検定試験受験者への対応

中国語検定試験受験者に対し最新情報と練習問題を提供するため、中国語検定試験が実施されると直ちに、出題された語彙や文法といった情報を提供すると同時に、これらを踏まえた練習問題を各課に追加することとした。

## 4. 教育実践による改善成果

### (1) 学習意欲の向上

昨年度一年間および今年度の前期に、筆者が担当した6クラスの内、2クラスの合計104名の学習者を対象に、e-Learning教材を導入する授業形式を試みた。この2クラスの学習者の多くは、同時期に別の先生の対面授業を受けている。授業後のアンケート結果（複数回答）は以下の通りである。

- ① 「従来の対面授業との比較に」対し、e-Learning教材を利用して自分のペースで発音練習が容易にできるという回答者は76名。
- ② 「e-Learning教材の必要性」に対し、必要であるという回答者は81名。
- ③ 「学習効果」に対し、a)自分のペースで学習できて大変嬉しいという回答者は61名。b)授業内容を容易に確認できるという回答者は51名。c)授業後に即時復習できるという回答者は48名。d)パソコン

を使用して学習するのが楽しいという回答者は31名。

- ④ 「対面授業に比べe-Learning教材を導入する授業」に対し、e-Learning教材を導入する授業が受けやすいという回答者は67名。

特に自由回答欄では

- ① 自分のペースで聞きたい発音を容易に何度も聞けることは学習しやすい
- ② 教材部と辞書部を相互に確認することは容易であり学習しやすい
- ③ 授業にて足りなかったと思うところを自宅においても授業と同等の環境で確認や復習ができる
- ④ 収録された音声は授業担当者の聞き慣れた肉声で親しみやすい

などが挙げられた。なお、与えられた課題をやり終え、自ら積極的に関心のある内容を選択し、音声に従いながら学習を進めていく学習者が目立った。このような学習者は授業終了後、自ら進んで教員に対し学習した内容を披露し、習得したばかりの会話が成立した瞬間の喜びの顔を見せてくれたこともしばしばであった。

以上から、学習者の学習意欲がe-Learning教材の導入により高められたことが分かった。

### (2) 個人指導の改善

音声を用いた自習環境では、学習者の学習進度に応じた課題提示が可能となった。一方、学習者にとっては課題の解決に当たり、必要時に教員に指導を求めることができ満足しているという結果を得た。よって、個人指導に対する不満は、音声を用いたe-Learning教材によりある程度改善されたと思われる。

### (3) 自習回数と学習時間の増加

学習者は授業と同等の学習が任意の時間や場所にて可能となったこと、また教員からの自習指導による自習回数の増加により、e-Learning教材の利用者の延べ人数は、104人

の受講者数に対し4月16日から7月31日の間で2,722人となった。また、1回の利用時間は平均15～20分間であった(図6)。前期試験直後や後期試験直後の利用もいた。これにより、中国語学習時間の不足をある程度解消できたことが言えよう。

#### (4) リスニング力の向上

従来の対面授業とe-Learning教材を導入した授業を比較するため、それぞれのクラス(それぞれの受講者数は57名と54名)に対し同一のリスニング試験を4月から6月までの間に2回行った。ここでe-Learning教材を導入したクラスの成績(平均73点)は、従来の対面授業のクラスの成績(平均66点)に比較し、平均7点(50問で100点満点)上回った。また今年度の前期試験においては平均4点(100点満点中リスニングは10問で20点)上回った。これはe-Learning教材を導入したことにより、学習する上での環境が整備され、学習時間および回数が増加した効果とも言えよう。

#### (5) 中国語検定試験受験者の増加

e-Learning教材に中国語検定試験対策部を含めることで、5年前の受験者数5,6人程度に比べ、昨年度の受験者数は40人を超えた。特に昨年度の2年生のクラスは全員が中国語検定試験4級を受けた。うち92%が合格し、その成績は総合得点、リスニング、筆記どれも全国平均点を上回った(図7)。

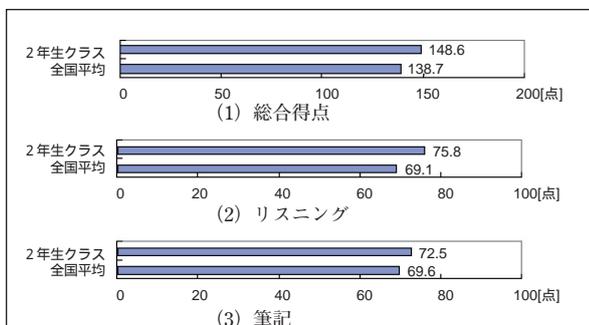


図7 中国語検定試験 全国平均との比較

#### (6) 再利用者の出現

一般的に1年次に初修外国語を履修したのちは再度学習することが時間的、環境的に困

難であり、e-Learning教材の開放により再度利用する既学習者が現れた。昨年度の利用者は4名、今年度は既に11名(単位取得者)にまで上っている。再利用者は就職目前に中国語を再度学習したい、また検定試験資格を取得したいことが主な目的となっている。

### 5. 成果の発展性と今後の課題

中国語e-Learning教材を開発し、これを導入することにより、語学学習環境の改善、学習者の学習意欲と学習成績の向上、特にリスニング成績の向上に一定の効果が得られた。また、授業外の学習指導にも有効であることが確認できた。学習者は教材を利用し予習・演習・復習という学習サイクルで反復学習ができること、また、独自開発ということから学習者の要望や中国情勢の変化に対し、内容を安価に即時更新できるメリットがある。そして対面授業にe-Learning教材を導入した授業スタイルは今後の語学教育の授業形式として期待できるものと思われる。

最後に、本e-Learning教材の内容は基本的に大学における初修外国語の履修要項および中国語検定試験内容を基準としたことから、他大学においても使用可能であり、中国語検定試験学習のみにおいても効果がある。

今後の課題について、日本と中国の漢字使用は異なる場合が多くあるため、漢字を書く練習が必要である。したがって、今後、e-Learning教材に漢字を書く演習が可能なソフトの導入を検討している。また、引き続きe-Learning教材のさらなる有効な活用方法についても研究していく。

#### 謝辞

本学部情報教育センタ、研究グループのご協力をいただいたことに感謝の意を表す。

#### 参考文献

- [1] 郭海燕:中国語・ドイツ語・フランス語基本語彙の作成研究中国語篇.日本大学理工学部第46回学術講演会,2002.